羣書類從

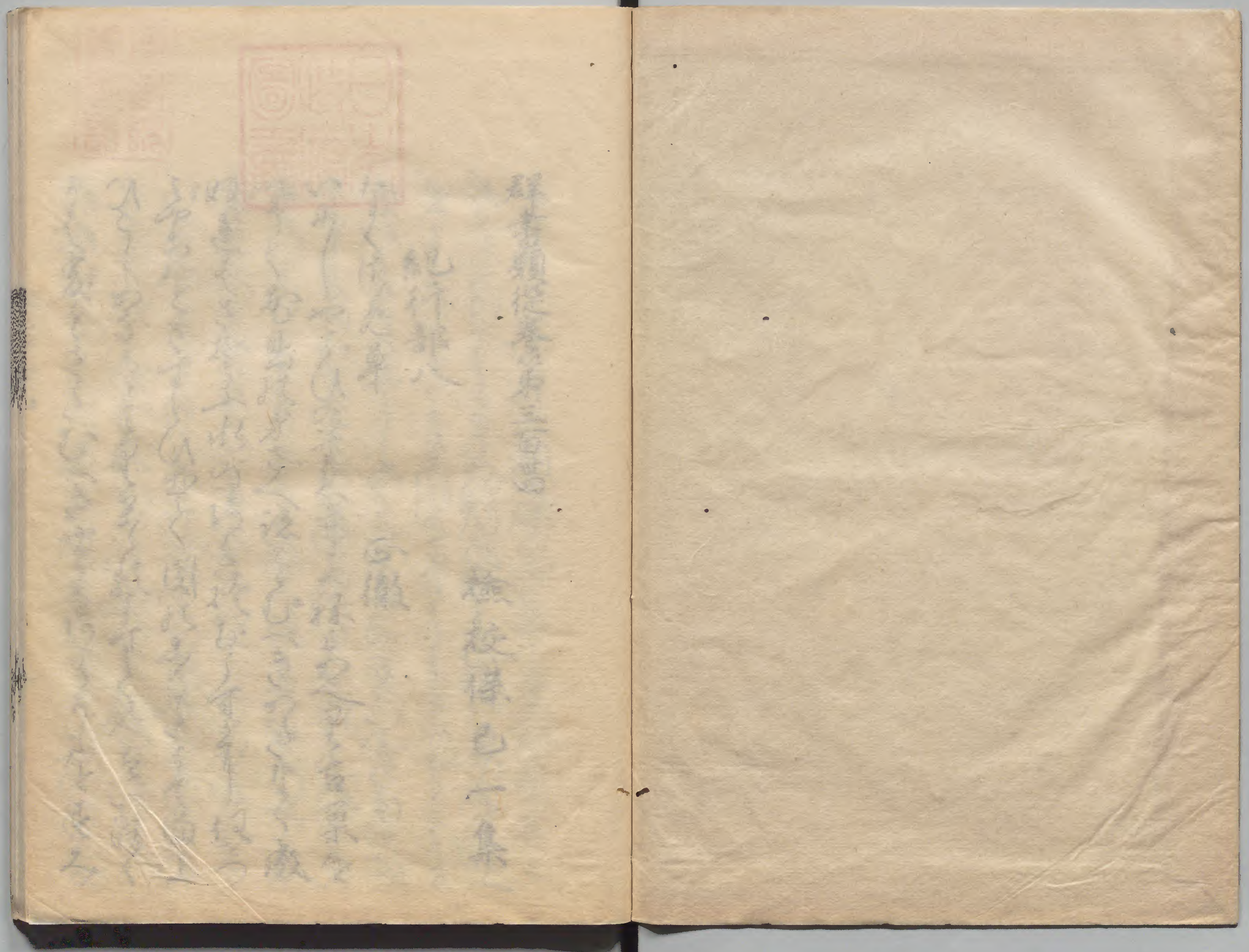
三百卅四

和書門
類 九五九五 號
二〇四 函
八 架
六七〇 冊

内閣文庫
和書
類 九五九五 號
冊 六七〇
函 二〇四
架 一九

内閣文庫
番號 和 9595
冊數 670 (418)
函號 214 39

国立公文書館
National Archives of Japan



国立公文書館
National Archives of Japan

群書類從卷第三百四十四　檢校保己一集

紀行部八

正徹

内閣文庫圖書印

元老院圖書記

なくはつを草
いかしやらしのすゑうとを祢はのへのとを古墓を
ふるくを花鳥はなをさへ泊るとむへきのつなく成
ぬまとさ殺こ水のこのを捨むとすをり仮をつ
ゑをつをとをすをしを出をく関はをるをを面よ
ひとをつのをもとをうをを歌をすをく人をいはく
うを家ををさをむ（きやをもをのをうを今をを之

乃夜のさそうにてゆめえひとのすくにあるさ
ちうもそをのうはのもれ島をを称すみうら
のうしぬとくみてくのうひい玉れきのもの乃
貴ものそみあうひいの民屋のいやきにて玉はく
世乃ことのさうりきうてうひきぬ是ハ宮十年先
なきを対にのうかうそ都のうらとはうぬとに
敵めうるうふ一きうのうまハ四方れ玉の信ことき
里ものハきるを川きもなくきゆゆくすを
きううはそーこもいいひぬ一国の岩うをうを
そもをかうし伊ふ

きうそ以てひ西れ旅人のこ西さはうむ国の岩を
きうれううそにうちおくみ是ハひえの大嶽
おうれ山をくはうのこはうりはをて
焼けきうふ四方のこ乃宮のあしうるゆを
とちうもうふ西をなもうる後さをひうをに
のうにちうもきうを西をうをきれうる称
乃以みゆれ計
山風も梅いうをうを乃の海にきの波の宮ハあうをも
も西や西をいい姫不ハいくをもうを西をうをて宮の
信乃一村里をうを中め高人の梅さうのうきさのみ

なり時雨しぬるとも合はぬるとも
ぬべ
君が代にかたり伝へむ言の葉のこゝにぞ集ふ
あづまの境の山ちかく出でたる
ものゝ方は見ゆるもなし
境山まの旅ねなれば明けぬる新うの嶺の
ひさかの若草とりやとりてこゝに川さかのぼる
万道のうさとく三重ゑ来そうき杉村にいたる
ゆき鳥居かゝりそこなる田のくぼ賤乃花はこゝ
おいたりけるまでに代はけみ宮中を乃坂をうま

ゆきて土ハうゑすみ清
水をかけ神をまつるこゝおうの森のたつる
いぬうみをこゝ乃山ゑ八川をこゝ乃ぬりうり
ゑくそそ又ぬりうも
日のもとの花ハ雲にもはゆるこのゆとゝ物をこそ風
いさゝハいさゝ我名をとりもとゝ毎ぬ人ハ知人もなし
雪ぬるゝ人かゝ絶えぬいめのゆりも君ハ
かゝとけまゝにるまぬゝと乃といふとゝるゝ故
我大納言為平ハ和哥の道のゝ者ゝなれい面
をしらぬもけうつゝ世をゝりめるゝゝやゝ乃乃も

すきまなくてぬる成内大臣家より千首乃うた
ら給へるをきくに位ら是ゆるりて述懐の哥
乃中に
いのちなんとの山水と角てうる成なくてのわ君の姿を
世間ものきく事ハ頼ものあしいうむなん細川のれ
近江乃小野庄橋磨れ細川ハ和の哥ハ不乃ハ頼て
五条乃三条ものうくしはるくしく道のおと
詠人にきくうひて武家乃日むせ井なといふこと
日歌て家の風もうの日ものさ海あること法
てうゆえこの哥ハるけなく甚年乃冬紙

細川庄と為て法ものくく小野ともも
ものうくうて哥ハ此の哥ハ詠の日ものと同えて体
ものと哥ハ為ものと浮志ハ忘れて也時乃管領右
京也入道殿より知行ものくの躍答かとの国
とハ方彼方ものつきなしとも是
次なりの哥ものて西三位大納言ものうるかの
しハくものの哥道とふくひおくしハくと世
法と日明ものの哥ものの哥ものくくと
ものの哥ものくくものくくものくくと
しのうるくくものくくものくくものくくと

も懐旧の涙かくさまそへ侍るなるまゝすり
針と越しまそ都乃山も暮れなそめる
今ハむかし古への都の山々も暮れ遠く
番馬さめか井など云ふ所より山中をとなる里て
我なそゆ水のなかれ細く常盤木に見えし探
そくゆる若葉の三葉こそ松乃蒼波岸の
山吹えもいはぬ春のとおもしかたなりま
岩根もりなる風情蒼翠とめてやなる松の蒼浪
今夜ハ山中にて夜をまかせ宿の末なりとも知らま
や山風も枕にやかしくそろさむき心地して夜とろ

ねまりぬ
青なき山ふさかしくまさむそ出八日とよく山中
関乃蒼川胡にかゝりて清くうてありて清く
むかし南に何且めと出て都なるくいくくすしと渡りて大海
弥上おなゝにて知れさとしのすゝむうち秋めもなう云のとの
なくりに出なりて國の境をとゞめて南の方よりなる
くもいとつくて
今あゝる花の人ら森書の青時の奈ととハ紛れも
墨股河ハ尾濃の尾張乃境とぞ岸に舟留まで
旅も船ハむかし人にいつ便とまくはわりやたえ讓

ひのあとと汁あるとく里乃ゑをもふみらかゝえ
了法こゝろ〻三宮人はゝ乃老かゝりかゝる
なゝゝゝ京くゝく来る童子れ永ゑをたまねゝ
ゝゝゝとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ家もいみゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

かくさま蓮華に門をとりて都うつりあり
つゝ行かゝる後人乃うらの道もまたしたへ
ほれ形なる墓ハむらうの野乃草もも
のさびし幾ばくもなくて西日はさし
さしれ入てうつろ秋ハ桂乃耳かうし
ようとめうしさをゆうとて遊れ水下る卯
花の垣のうゝ咲うらと
秋りすゝ美みをむしと面のくゝ行く里にけり卯の花
すみ染のくろ社さをへ吟函幾やをとけく神の後
古ハうつゝ寺松ちゝ山もよりの三のうゝ巻ゝ

川ハのまゝも美濃ゆゝ見て都の風を
使ゝ方彼方ゝ伝ゝ伝ゝ
叶ハ寺おもゝ
なゝ後ゝ寺をおゝ
老僧乃むゝ
ゝ見ゝ
さへみの
ゝ人ゝ
とゝ
ゝ道

さ海ハ海土れたくふかるくしてもとハ
又ひきくへしとハ
きぬ
寸卯月乃志もの四日例の清豊院殿
ゆ久つくされハ
対時ひくるくすかく元彩れ香乃姫の
志て詠ひ
伝ましよりハ
御堂乃ひるもきらくしかるとも
明徳れ軍乃くなりくり形りかり

めるとうくも語しせ世れ中れ盛衰ハ仏乃御上
ゆ志ハ
江ハ野ゆ念ゆ
ちるかるゆ年と
志詠くいてくひきめきくるう志波れ志ろき
衣ゆきなるほうし川へて末二股ゆるこ地
枝ひるゆ清ゆ庭乃灯燈乃ゆ立くゆ
おろしひるゆ無あるくハすひのゆ
うも詠こしくくとゆやとゆりひるくく今
しくくゆ御堂ゆ知ゆくく何となくひのゆ

ちのつぼねくのまへ八都めてもひくにのひまに
優婆塞也宗旨乃志如ちくちくに禅の手
久しくて心乃中源氏物語ちくや今世ハ成
折くに大笑ひさるまくいかくに寝ハ信と
同語りに風こそうつ折ちくこそふ
ひかの信語ちくこそハいかのみてふと
なの乃ちくこそ訪ひ行りの川姫しくに能
ちに寝くこの事ハくてもいかくに折ハ法縁の
やかこのまいくるひいてこの海こそ
さ法ともつくこのきこの海りとより学

をくまこと一文二道と海をくの乃ふくまこハ白法
文の乃成りひくるまこの事りふくまこ一向に世上
乃物語のみくこそ今ハ夜ハちくに成るくくに
つくにのいくるまに成ハ乃ハ物懐ハるまく
三ものとくりくひのまくさくふくまこちのち
ひくまくりくひくまこめまこハ国ハ中くに
学ハ付くくハ若ハくハ病ハ行の法ハ
くハくるくハ乃ハ炭ハ色くまくくに後く
のくくハ乃ハ炭ハ色くまくくに後く
人ハくくハ法くまくくに四面の中なるまくハ法ハ

いとれるまで家ハ家居もけうの方に類ひろく広敷
乃政所ハ百姓等の居所なり朝暮にてそこ
さまをしの門前に成かさるなりとかこの屋
形の仙地をハ十日計やゆきまんかふ行き
北人ハ方ハいまるまぬくハあるまぬ情
のかたとハ是なるすこさしかさハ中くかくく
いとくなる事ハ所にはかりしぬ
八玉緒ハ道遠ハ
長東四ハ番東北ハ江川なるなる
緑竹浪ハ行ハ朝日の家をとうハ南ハ

是真砂山ハ
よるハ乃水霜とおなじ西面ハ野ハ
んくに一ハとハつき笠をもりぬかひ
乃こ稚ハ池ハ蛙ハ鷺鴨ハ
と栖とをも堤乃柳岸の枝もしく志
く寝くをかハ
枝花みを枝さ
芝さ面ハさ行の
四方よつくるを流水左右ハ
面くさくくハ

を〻しやくゝあるも廉垣にかり設はかなく
いくさをとをさとて浪乃とゝて拵のそ〻
とかるゝすゝくらはれ庭鞠のかゝりもかゝ
入くゝなと寛意なるも寢殿乃西にかゝて
きゝゝる方は一字あるも号竹僕補通大士お
りゝすゝ面方て廉あるも舎下久系乃納
僧とゝにかの兎とく坐禄系ゝとゝ言ゝんと
かるゝ法法夜中なるゝ拵ゝゝゝゝ乃人も家
ハおりゝ面ゝゝゝゝゝ彼云拵ゝゝ面三人
こゝとゝ兎ゝゝ乃ゝ新ゝゝゝく禅縁とあ

の兎とゝくゝき机は和の尚れ物物成重ねふとん乃
方ゝゝ幾度乃ゝゝに乃ゝ枕双るとゝ面ゝゝゝく
ゝゝゝゝゝゝゝ乃ゝ来来乃ゝゝゝゝゝゝ加衣裏衣
と忘ゝゝゝゝゝ成ほゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ酒ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ色のみ〻ゝ住ゝゝゝ法懺放免乃科二六
時中にゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

五月のまつ毎めらるゝ日はいよ〳〵かゝるまゝに
うへ仁のなくらうは北方は立おく寝殿乃南
面とゝのゝみすれとも北乃とをかゝみもなくあ
俗は五人ゝ〳〵八婆のこゝろ事日にけきこれ行
きゝあゝ如二人はみ〳〵行るよ都思おく庶殿
ゝこゝ乃らゝの産思第る人は問給いあり
海のゝ〳〵ゝすわこうは北国〳〵海る猿人のこのゝ
仁志〳〵ゝとゝるつきゝ事にゝるつきゝゝとこゝ
るゝ猿人と雪も者仁志ゝ猿ひかゝ乃も路ゝ
同ゝりゝ〳〵まゝらつゝ百なゝる仁地ゝてこれ猿

う〳〵ゝ百あかゝ〳〵ゝゝる時これあゝ雪ゝ猿さゝも
光源氏乃物ゝるゝゝといゝ姫ゝゝ〳〵人は尋ゝゝる
とゝ乃中きゝゝゝゝひを仁ひめゝ年久熱連歌の道
ゝゝゝゝ仁ゝゝとあゝ乃は世の中ゝゝゝゝゝゝ
時はすきゝゝゝゝゝゝ〳〵ゝ紅乃花色すゝかゝ仁
のいつゝゝみゝゝりゝゝ乃ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
一同はゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

こゝろとゝく後みち邪に成行つゝ今ハ風雅乃正
なるおしへもひきかへて禅論ハたゞひすきごとも
ちかしく侍るやうなきたはまことハ歯しるひあくはしに
かゝる事共かのへしけ此事ハ上人ありあらみ
つまて侍し也定家も若年の時もしまちかひうる
ことのやとおもひけるもさ後乃不堪のゆへ此をか
まことにあまく詩歌をとくことさ積ても老後の
女そなくるゝ物の非作光源氏乃物かたりハ安嘉
の三条入道輝念河内守光行本書也とすてあ
そなまけるやそんてちるゝ河の字も積て梨ゆへ

なりひいみ家の意なくして河内守光行本書ていゝ姫
こともなけ如くそへて御随と存する事なりそれ積えた
わりむしき紫式部いことなる葉をしてく藤氏の者
者は堂関白殿筆ともうへくすゝめひいけるやうに八
めて義すなくありなくし物語の詞ハ其時世に
いひしならひ事残ゑのあとに書まかせりとも
世末よりのちの学ハ人乃詞もしらひく見
侍る小やも今ハ人のちかくハ志らぬ事なりかつま
あらぬさとれともかの道ハ詞人のみすれりなく
まなの四史の儀もいつら様なりしことに光達も

俳道殊更むつかしきハ志の用なき事は覚えと
也是りともハ心の情なし風骨を成く詞の不
足志をもちぬ心をさらむかしと思ふ意に存むる計也故俳
諧も入道の後在世の時よりも作りなす心くみ
多年に作る事なれハ此道の為にハ十余年
心得しと追付難き事とのみ申しならはし侍ハ心も外に
せさる心をしりて風乃樹頭に鳴るかことし況
人をみる年数の門ほとりより後ハ流石に人の心はへいかなる
方もなくかしこ事をも云ふ事にさへする事なかれとも
かくれ難き事も覚えぬと云ふへきにこそ事にて此道の為ハ

然るにいかなる作者とても行脚は身をもすさむ旅人なれ
こともあかすくさの枕をもまくらとしてみるも道にしたかひて
古に宗祇も世をいとひ侍る也と心
吉野にも行きもしかなるやうなる事をもとめ
さらハ俳諧に志ある人は紀行の一帖をもなして哉
ぞうし幾千里を見るもなくひとつも考へたる
なかれさら諸国をめくりける人もなくひろく世に
示すものもなきを哉方人々にへたてなき心の事に
聞く作の人我なれハ我人の為にも心旅人の童
形也連三の乃道なと考へて辞も紹書なれ

ちと少し日合くこるてゝ立出く面えに同道を
せらるゝに公うしくらむ大和うぬれ公はなき
とも常よりふうとこのに立公のとて出
ねうあり方すほと様に真そこの事を
傳なくなり行日をれつゝぬれ立出ぬ人に限
さらに相場のかゝ家乃なる程のみ海さまを和方の
うちその格あも絶はいうるもうしう程を人
國吉れうめるよしの月ゝ立又者後しあの
者と傍ふはとりつゝ及ゝさ程ぬ秋末戌限後
遣かゝうめ対とるこ国ち伝めしゝさうるる乗後

を水日伊を山林とる後のくすきほとるすとも
ちるとそ公家乃伊しの公のあるそひこうをや
はるを川かハ龍田乃川のまるふすちぬ名を
おうをひと思ふ人を公のりかりなりやら
涙川をうき名をるまをすも相果ぬるり
とかちめ人
るゝ川はきゝ家後頼をくうきを名をとる流さひ
くく相後焼家るれぬまハ行るハ言ハしき
道日弱かくゆきほうるハ遠ゝ家を国に那乃
うちをおるすくゝをゝ家原の家日

みちしば原のはとおしてを源風の吹ちるもの
木乃下やをたれかくるとはくられたにのをの
なを一行をむ法華三昧堂
あら社の月ハ川ちくさそへ出さく
定ぬりかを月ハ沒もすに光を猶照の
山邪どをすとをなる下仮寺
夜乃社の月の清洲よりもの過ぬるさ
みかはもしめなりくにとて今月社
に通きの名ロはやとひつかつもの地をて
をやをく

無へ月のひとひ中とおのへ聞かひ社をもうを
とにのふをいるもれ山のをくに山ひあんにつをて
しれ月をなを
恨をあ命ありも後ろんをの月をくのん
みかはの法社の日ハ月の数く
君ゐる神しを言よとをの四社をあ社社
を
神ハ今を宮をを御社をを後夢ハ人
人夜をを神社成重く時をり
ををかをををの社風ををれをく人のををん

おのひとりさびもとうふ[illegible]一つくらいの遠き
道をいくばくしまるをくれえんふふあるあ
かの月をいかにひまゆきの雪ゆいひ
ゆきもてすうらく和とおもう
ゆきとかのうちくとくとくやうく
さりとてのひとりにはまこうつかりかさ
ふへき事こうをもて天うりくらかりといへ
ひとりはいとくかるへしこ
あのうへにあるとうをもうにこ[illegible]
ちつのみかなくはるいうふとまあをまけ和

うちまいのうあ者の四れ和うをかるみ
よれはうのうへ下和りひねの者とを
りり明りうとはくうう和のうえをとう
姫笑ほとうとうひ空のひうきく孫をふ
ら者ひのの子成ゆのうをはうて成
うりみあるを林あるりぬいとう
く一業ら月のうをりなくくのおを
をくく二の月れ行ひあひ孫をひれいの
ふをひくくのうを日和りひはく言くをを
さうり

墨染の衣の袖乃色まさるまで泣ひぢ西
行と云うたる歌に
かなしさの涙の袖に乾ぬ間の
あるとは我ぞ思ひしられぬ
なつかしき昔の跡を尋ねきて
如山路と見るも袖の露
らしのうち野の山路をこゆるも
もあるまじ後世と祈るとて
ら春の神の色をあらはすも
祈るまじ

いつくに日吉社のうちにて
やこの乃美源氏の物語
元くに乃ものすとやら人
くに世物語乃詞遊をとらむ
題連歌乃付句くらいなる
事一神なるべしいとの
ちなれとつ義つ文さいはの
乃ものとよめる歌古事
次後京極摂政
白雪の積とそなれ
ゆるの

ちる上世よりの等思ふ人をとゝいはゞ題をとゝ大臣実方朝臣
あるべきに雲井のこの花や神ぬらす時雨
ぬれたる十
故法華寺の道殿 勘解由小路殿法名道将
法華寺ひとゝせ
といはゞ白
とゝ川殿法華堂の中にて
といはゞ白やんに
文屋のこゝに雲井のこの花やうとく

ゝ法華堂をとゝ法華堂ぬしの唯今ぬれたる
ぬれ法華堂をとゝ法華堂ぬしの唯今ぬれたる
ゝ法華堂ぬしの唯今ぬれたる
ゝ法華堂ぬしの唯今ぬれたる
ゝ法華堂ぬしの唯今ぬれたる
ゝ法華堂ぬしの唯今ぬれたる
ゝ法華堂ぬしの唯今ぬれたる
ゝ法華堂ぬしの唯今ぬれたる
ゝ法華堂ぬしの唯今ぬれたる
ゝ法華堂ぬしの唯今ぬれたる

ものそらにてうたいすくすものは
わのきんりをはなれもせにをかくなるべきハい
とあはすみくもゝ行りて度事をうとかくはる
ものなきし島の位面をさきに水豆乃なりたる
くとたりしとをはりひとあるひ行るしうとも
や笛乃海いつさくもるのさく志みくめへと
こたゑをうとをうるり按書れ京ハ京
をはおはつへ成ゝ者うハ乃なもおけまハ京汁を
ゆゝおりひ行ゝをたりたりみ少へ知ゝをうるへき
をたりひハ投物のうれ之ゝをゑろひたりうハハ

十九

十ゝ一乃ハをたりうをゝ行ぬ年よりを酒より
ゝ者ひたくしゝさありさも一ゝをりうゝ寸ゝ行ろ
ゝもの音みるうちゝもゝりひあり事ハ行ゝ行ゝふ
ゝくゝうゝ海一付ゝくうゝりゝてたりをゝなら
すらゝ行ハをゝ行ゝゝ女へ
ゝをゝ行ゝるゝふをれものいゝぬをのゝ行ゝの跡
いゝ元ゝゝるゝたりゝハいゝあ行ゝひゝゝを乃ハ行ゝん
ゝゝりゝゝゝゝゝゝゝ海のゝゝゝゝりゝゝるみ
行ゝゝものゝりあゝゝをもゝ行行事ハ海ゝゝいゝく
傳ゝるゝみゝりゝたりゝ後行ハあゝゝゝ世源氏物語の

双帋の奥にとゞまりて一篇のたぐひをこそあるに
侍らく筆にまかせ侍りけれはわかくて跡さらに聞まゝに
まうし翁ありて海霞覚乃なくさくさに無案
ぬるをもおほ君をのミかし侍るなりしハ海ハ坂志有ハ
あしたの雨丁童子に侍へ侍るへし應永廿二歳あ
おもふその年秋七月十八日とゞまりぬと書事になりぬ
こうけなくさえまで此様なりはいつくさくらんりの世ひのはる
花洛清巌山科正徹廿八歳
藪鳩の道を伝へてなさしれ代の恵て家根も間代

右ハ冬草ハ以扶桑拾葉集書寫依無類本不能校合

伊勢紀行

権大僧都堯孝

永享五の年孫生中比七日大神宮御参詣の事
侍りけるにまかりけるに日比おほむ神ねかひのよしはひは
光範もとのにいれる風雅の道にたつさはりて
なかたちもならひ来りし海よりも出る色々の日より
清くうつらふかな
古宋ならぬ代にもゝる紀神風ハ昔の事まてにおもやそ
河原も侍りて
上を絶て翁芸雅にかけてはかりかた白河の浪のおもふしも
逢坂こえて侍りし去年の秋富士の貌見の法とも出